

中江兆民のリベルテーモラルをめぐって

船越素子

1 はじめに

東洋のルソーと称される中江兆民が単なるルソー主義者でなかったことは、よく知られた事実である。しかし一方、兆民を他の多くの啓蒙思想家や自由民権家たちと分かつものは、その倫理観である。兆民の政治思想の根底には人間のあり方の問題として、ルソー『社会契約論』におけるリベルテーモラル *la liberté morale* が深くかかわっていたと思われる。

この小論では、兆民がルソーとの出会いによって発見した内面の自律を表すリベルテーモラルを、自らの思想の営みのなかでどのように位置付け深化させていったかを考えてみたい。

2 リベルテーモラルの源泉

①『東洋自由新聞』第一号社説

中江兆民が、資料に見られるかぎりで公に彼の自由観を論じたのは、『東洋自由新聞』第一号社説（一八八一年三月十八日）が最初である。その意味で、ここで述べられた自由観あるいはリベルテーモラルが、兆民の新しい価値概念模索の始発点であったと考えるのもよいであろう。

この社説において、まず兆民は「リベルターの語はこれを訳して自主・自由・不羈独立といふ」と定義づけている。それに續けて、自由にはリベルターモラルとリベルターポリチックの二つがあることを説き、リベルターモラルについて次のように述べた。

「リベルターモラルとは我が精神心思の絶えて他物の束縛を受けず、完全發達して余力なきを得るをいふなり。古人いはゆる義と道とに配する浩然の一气は即ちこの物なり。」

兆民はリベルターモラルを第一の自由とし、續けて第二の自由リベルターポリチックについて説明している。兆民がリベルターポリチックとしてあげているものは、一身の自由、思想の自由、言論の自由、集会の自由、出版の自由、結社の自由、民事の自由、従政の自由であり、これらは近代市民社会成立の必要条件であつた市民的自由あるいは自由権の基本権とよばれるものである。

そして最も重要なことは、兆民がリベルターモラルとリベルターポリチックを並列的に同レベルで論じているのではなく、リベルターモラルをこれら市民的自由の土台となるより高次の自由概念として位置付けていることである。

②『民約訳解』（一八八二年）

『民約訳解』は、ルソーの『社会契約論』を原著の第二編第六章まで漢訳し、兆民自身の「解」を付したものである。ルソー『社会契約論』がみごとに意訳されているが、両者の間には微妙なズレがある部分もあり、そのズレのなかに兆民自身の志向性をかいま見ることができる。

ところで、『社会契約論』において道德的自由（リベルターモラル）が論じられているのは、第一編第八章「社会状態について」である。ここでルソーは「自然状態から社会状態への、この推移は、人間のうちにきわめて注目すべき変化をもたらす」として、自然状態から社会状態への推移にともな

って、人間が失うものと得るものとを列挙している。ここでのルソーは、自然状態と社会状態のどちらがよりすぐれているのかといった価値判断は棚上げしており、同様に、自然的自由と市民的自由のどちらがより高次の自由概念かといった価値判断も不問に付している。ルソー自身は、人間は社会契約によって、個々人の力以外に制限を持たない自然的自由を失い、かわりに一般意志によって制限されている市民的自由と所有権を獲得すると述べているに過ぎない。

しかしルソーは、人間が社会状態で獲得するものとして最後に道徳的自由をつけ加えており、道徳的自由こそが「人間をして自らのまことの主人たらしめる唯一のもの」だとしている。なぜなら「たんなる欲望の衝動に従うことはドレイ状態であり、自ら課した法律に従うことは自由の境界である」からだ。ここには、カントにつながる自律的自由の萌芽を見いだすことができる。しかし、ルソー自身はこれ以上道徳的自由の探究を続けようとはしない。「自由という言葉の哲学的意味は、わたしの当面の課題ではない」。

これに対し兆民は、道徳的自由（心の自由）について詳細な解を付している。つまり、社会契約によつて初めて自己の欲望を抑制することができるようになった人間は、「我より法を為る」という自己立法を課し、「我より之に循う」という自己規律の段階を経て、「心胸綽として余裕あり」という道徳的自由を獲得することができるとした。この意味で、ルソーの道徳的自由の概念に含まれた自律的自由の側面を、兆民はより明確に摘出したといえるだろう。

また兆民においては、「天の世」（自然状態）ではなく「人の世」（社会状態）こそ、人間を人間存在たらしめているのだという認識が窺われる点も見逃すことができない。ここにルソーに見られる自然状態へのある種の郷愁を、感じ取ることは難しい。同様に、「天命の自由」（自然的自由）に人間がとどまっているかぎり、「本心ははじめより未だ主宰を為すこと能わず」という状態を脱することはで

きない、と兆民は考えていたようである。つまり兆民にとつての自然的自由は、人間存在が本質的に自由であることの平等性を明証するものとして、意義を持つものなのである。したがってルソーとは異なり、兆民は市民的自由を自然的自由より、より高次の自由概念と捉えていたのではないかと思われる。

さらに、兆民が社会的自由に「人義の自由」という訳語をあたえていた点も、そのことを裏づけるものである。ルソーが西欧思想史における市民 *citizen* の原義の復権を『社会契約論』で行ったように、兆民はルソーが市民にあたえた市民社会の倫理的エートスを明治十年代の日本において「人義」として理解させようとした。つまり「人義の自由」とは、単に社会契約によって、人間が享受できる自由なのではなく、契約によつて創られた社会の構成員として、自らが主体的に担つていかなければならない自由であつた。市民社会を内側から支える倫理的エートスに裏づけられた「人義の自由」が、「天命の自由」より高次の自由概念であることは、兆民にとっては当然のことであつたろう。

③明治前半期の思想と兆民

『民約訳解』は「解」を付したとはいへ、あくまでも翻訳書であり、兆民自身の自由観を直接的に論じたものではない。しかし、これを東洋自由新聞第一号社説との関連で読み込んだ場合、兆民がリベルテーモラルに託した自由概念の輪郭が浮かびあがつてくるように思われる。

前述の社説において、リベルテーモラルとリベルテポリチックに分けられた自由とは、自然的自由（天命の自由）ではなく、あくまでも社会状態における自由つまり市民的自由（人義の自由）を意味していた。しかも市民的自由の中に道徳的自由が包括されるのではなく、逆に道徳的自由こそが社会状態におけるすべての自由の土台となるものであつた。兆民がリベルテーモラルを「我が本有の根

基なるを以て、第二目行為の自由より始めその他百般自由の類は皆此より出で、凡そ人生の行為、福祉、学芸皆此より出づ」と社説で述べていることの意味はここにある。

市民社会の主体を担う倫理的エートスを問題とするこのような兆民の志向性こそが、明治啓蒙思想家と兆民が一線を画す点であろう。明治啓蒙思想家達が主張した自由は、（それぞれの思想における濃淡はあるにせよ）いわば市民的自由であり、道徳的自由については触れられていない。彼らが主張した市民的自由とは、いわば自由権の基本権とも呼ばれるものであり、近代市民社会成立の政治的必須条件でもあった。国家権力による外側からの規制を排除すること、内的な思想・良心等の内容については問わない相対主義の立場がこの自由権の基本権の土壌をなす。この思想や良心についての価値相対主義は、ヨーロッパ近代思想が悲惨な宗教戦争の果てに辿り着いた、ある種の妥協の産物でもあらう。極言すれば、明治啓蒙思想家の多くはこのようなヨーロッパ近代思想の悪戦苦闘の末の結論を、その前史を問題にせず結論だけを容易に受容したとも言える。そこでは、この自由の担い手となる主体の問題は消失している。しかし、明治啓蒙思想家にとつては問題にされなかった、近代市民社会を形成する道徳的主体としての個の確立こそが、兆民にとつては問題であつたのだとも言えるだろう。兆民が東洋自由新聞社説において強調していることは、この道徳的主体としての個の確立こそが自由の基礎であるということである。つまり、道徳的自律性を持った個を構想しようとする視点が、兆民を他の明治前半期の思想家と分かつものである。

3 リベルテーモラルの理路

兆民はその後も、リベルテーモラル換言すれば市民社会を内側から支える道徳的主体としての個人の問題にこだわり続けていたように思われる。いわゆる兆民の実業家時代に翻訳・刊行された『道徳学大原論』にその一端をかいま見ることが出来る。これはショーペンハウアー『倫理学の二つの根本問題』に収められた第二論文「道徳の基礎について」のビュルドー Burdeau による仏訳本 *Le fondement de la morale* からの重訳である。

この時期、兆民は実業界に身を投じ、言論活動から遠ざかっていた。それではなぜこの時期に敢えて翻訳書を刊行したのか、しかもそれがフランスの十八世紀啓蒙思想でも十九世紀共和主義思想でもなく、ショーペンハウアーであったのか。そのように考えるとき、『道徳学大原論』は兆民の市民社会を支える道徳的主体の哲学的掘り下げという内在的・必然的要因によって生まれたものであり、リベルテーモラルへの関心の延長線上に位置付けられるべきもののように思われる。

ところで、ショーペンハウアーは『道徳の基礎について』において人間の道徳的態度における個々の相違を、「性格」の不変性に起因させていた。ここでの「性格」とは、同一の動因に対して各人の意志の反応を、それぞれ異なったものとさせるものとして捉えられている（第二十説性格の倫理的相違）。そして人間の善悪に対する感受性もまた、人間の性格と同様に生得的なものであり不変なものだとショーペンハウアーは考えている。これに対し兆民訳は微妙なズレを見せている。

「行為は或は変易するが如きも実は皆性質より出るを以て、その意趣たる初より変改する有る為し、唯学問経験の効に由りて稍や次序を得ると否らざるとの異有るのみ」（『道徳学大原論』）

ここで兆民は、「行為」が「性質」より必然的に生じることと、その「性質」が不変であることを述べた後に、「唯学問経験の効に由りて稍や次序を得ると否らざるとの異有るのみ」という一文をつけ加えている。

つまり徳もしくは悪徳を生得的で恒常的な属性として捉えるショーペンハウアーに対して、兆民は「学問経験の効」を換言すれば徳の後天性を、「稍や次序を得る」といった控えめな表現ではあるが、明らかに意識の範囲を超えて付言しているのである。

このことは、兆民がリベルテーモラルの後天的獲得性を確信していたことを、あるいはリベルテーモラルを獲得し得る存在としての人間の平等性を確信していたことを、意味しているのではないだろうか。

②『統一年有半』（一九〇一年）

兆民最晩年の『統一年有半』は、一冊の参考書も資料もない状態で病魔と戦いながら執筆されたものである。しかしそれゆえ逆に、最晩年の兆民の思想的地平が明瞭に表れているとも思われる。

『統一年有半』は大きく二つに分かれており、第一章総論では靈魂の不滅の否定、神の存在の否定、精神の消滅と物質としての身殻の不滅が論じられている。第二章再論では、世界の無始・無終・無限、時間・空間、主観・客観、精神の能、意思の自由、行為の理由、自省の能など一種の認識論や倫理思想が論じられている。そしてこのどちらからも、リベルテーモラルという言葉は姿を消し去っている。しかしそれは、兆民がリベルテーモラルへの関心を失ったことを意味していない。第十六節「断行、行為の理由、意思の自由」と第十七節「自省の能」で兆民がこだわり続けていることは、あくまでも市民社会を支える道徳的主体の問題であり、リベルテーモラルの問題である。

ところで明治十年代までのリベルテーモラル観と、『統一年有半』におけるそれとは、明らかに兆民の立場に違いが見られる。

a. 『理学鉤玄』（一八八六年）

『理学鉤玄』はジュールダン Jourdain 『哲学講義』、フランク Frank 『哲学辞典』、フイエ Fouillee 『哲学史』、ルフェーブル Lefèvre 『哲学』を典拠とした哲学概説書の先駆けである。この第七章「断ノ機能」の中の「心ノ自由一名道德ノ自由」においては次のように述べられている。

「わが心の奥底に於て活発自由の性ありて、善を為さんと欲せば之を為し悪を為さんと欲せば亦之を為すことを得可くして、乃ち自ら決するの一事の自由にして少も他の妨碍を受ること無きこと極めて明なり」

ここで兆民は、前述した『東洋自由新聞』紙上での説明と同様の叙述を簡略に行いながら「道德ノ自由」と「心ノ自由」という二つの概念を区別し、あらためてそれを「心ノ自由」の立場からリベルテモラルの議論として紹介しているのである。つまり兆民は、あらゆる道德的行為は先行する何らかの外的動因によるのではなく、主体の自由な意志決定に基づくものであり、自己の意志による自覚的な行為であるとしていた。それゆえ、人間は自己の行為に責任を感じ喜んだり悔恨したりするのであり、ここにこそ道德的自由が成立する根拠があるのだというのが、ここでの兆民の主張である。

b. 『続一年有半』第十六節「断行、行為の理由、意思の自由」

ここでも兆民は、人間の意欲に発する行為が、その人間の純然たる意思の自由によるのか、あるいはその行為を引き起こす何らかの外的動因があるのか（意思の自由と行為の理由）という、いわばヨーロッパ精神史の一脈となっている自由意志論の問題を取り上げている。

ところでこの第十六節と『理学鉤玄』を比較した場合、道德主体としての人間の意志に対して、ある留保がつけ加えられていることがわかる。まず兆民は自由意志における非決定論の根拠を示す。意

志の自由がなく外的動因によつてのみ行為が引き起こされるならば「善を為してもかならずしも賞す可きではない、惡を為しても必ずしも罰す可きではない」というのがその根拠であり、多くの哲学者がこの立場から自由意志を肯定しているとする。ここまでは前述した『理学鉤玄』の立場である。

ところがこの第十六節においては「けれども深く事項を研究したならば、奈何せん、實際意思の自由といふものは極めて薄弱なもので有る」として、次のような譬えを挙げて説明する。ここに一樽の酒と一皿の牡丹餅があるとすれば、上戸は必ず酒を選び下戸は必ず牡丹餅を選ぶだろう。もし上戸が牡丹餅を選んだとすれば、彼がまったくの自由な意志決定から牡丹餅を選んだように見えながら、実は何らかの周囲の事情を見て牡丹餅を選んだのである。酒を飲みたいという欲求以外の何らかの行為の理由があつて牡丹餅を選んだのであり、純然たる意志の自由からそうしたのではない。このように兆民は、行為に介在する自由意志を軽視すべきことを説いたが、ここでの自由意志とは無差別的自由意志であると考えられる。

この兆民の上戸と下戸の例に近似した展開を持つ譬えが、前述したショーペンハウアー『倫理学の二つの根本問題』の第一論文にある。

この論文でショーペンハウアーは自由意志を否定しているが、それはこれまでの諸学説が、あまりにも「意欲」に対して客体を軽んじ主体を過大評価しすぎてきたことへの批判であつた。彼が否定したのは無差別的自由意志であつて、人間の意志的行為のすべてを必然に帰したわけではない。むしろショーペンハウアーは無差別的自由意志の否定においてこそ、道德的自由を可能にする地平を考えていた。つまり、たとえすべての行為が「動因」と「性格」（人間における行為の因果性を決定づけるもの）との所産であり、必然性の支配を免れないとしても、人間には「自己の行動に対するきわめて明白かつ確実な感情」である責任感情がある。ショーペンハウアーは、この必然性によりながら必然

性を突破するような責任感情を通して、真の意味での道徳的自由が現出すると考えていた。

ところで、このような自己の実存の問題へと下降していくショーペンハウアーの道徳的自由の地平とも、兆民のリベルテモラルの問題は異なっているように思われる。兆民においてリベルテモラルを支えている思想的支柱は、人間を自己努力によって人間的完全性を目指す可能性を持った存在として捉えようとする思想的確信であろう。

この第十六節において、兆民は孔子と石川五右衛門を譬えに挙げている。前者は日常の修養によって善をなさざるを得ないような「良習慣」を作りあげているところが賞せられるのであり、後者の悪の行為も悪の行為そのものではなく、選択の可能性がありながら、悪をなしてしまふ「平生の悪習慣」こそが問題なのだとする。

「吾人の目的を擇ぶに於て、果て意思の自由有りとすれば、それは何事を為すにも自由なりといふのでは無く、平生習ひ来つたものに決するの自由が有ると云ふに過ぎない」

つまり道徳的自由は、人間が自ら自由を意欲する自由意志のうちに存在するのではなく、「平生習ひ来つたもの」に負うているのである。意思の自由を軽視し行為の理由を重要視せよとする兆民の主張の背景には、自らの主体的営為によって道徳的主体になることを目指すところに人間の存在理由があると考える方が見受けられる。

c. 第十七節「自省の能」

ここで「自省の能」は一面的には「己が今何を為しつゝ有る、何を言ひつゝ有る、何を考えつゝ有るかを自省するの能を言ふので有る」という認識論的な自己意識であると捉えられている。同時に、「吾人は唯此自省の能が有るので、凡そ己が為したる事の正か不正かを皆自知するので有る、故に正

ならば自ら誇りて心に愉快を感じ、不正ならば自ら悔恨するので有る」という自己反省の力いけば良心でもあると思われる。

さらに、この自省の能を兆民は「人として禽獣と区別するに唯一の具たる自省の神火」とまで言い換えているので、人間存在に先験的に与えられた道徳性と考えることができる。また兆民は道徳的意識が、その獲得が後天的なものである正・不正の観念と反省的知によって成立すると考えていた。

このように『統一年有半』から兆民最晩年のリベルテーモラルの姿が次のように明らかになるだろう。兆民はショーペンハウアーを媒介することによって無差別的自由意志を否定したが、それはリベルテーモラルそのものの否定ではなかった。人間の経験に先立つ道徳性にリベルテーモラルを見いだすのではなく、むしろ無差別的自由意志を否定することによって道徳的自由の成立の場は明らかになる。つまりそれは、兆民が道徳的自由を、普遍的な所与資質であると同時に反省的知である「自省の能」を人間自らが培養していくところに、成立するものと捉えていたことを意味するのではないだろうか。

4 終わりに

兆民にとって、人間存在とは、まず第一に社会的かつ道徳的存在であった。『民約訳解』に明らかにように、兆民は社会状態の人間こそ人間存在たりえると考えていた。ルソー『社会契約論』におけるリベルテーモラルを、市民社会を内部から支える倫理的エートスとして伝統思想の土壌に根づかせる努力をしながら、兆民自身はリベルテーモラルをより内在化する作業を、『理学鉤玄』の著述や『理学沿革史』、『道徳学大原論』等の翻訳によってなし遂げようとしていた。兆民がその最晩年の

『続一年有半』において到達した思想的地平は、人間に内在的に存在する道德的能力への信頼と共同体を自らの意志的努力によって支える道德的自立性を持った「個」の希求であつたといえるだろう。

参考文献

宮村治雄著『理学者兆民』（みすず書房）

米原 謙著『日本近代思想と中江兆民』（新評論）